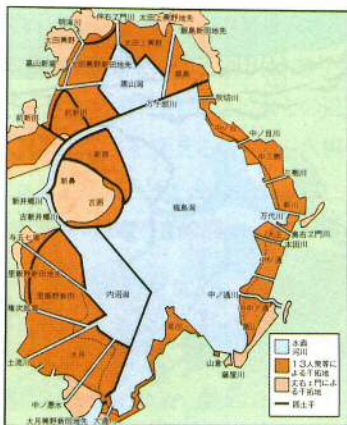


# 福島潟を開発して田んぼをつくろう!

## 近世の開発

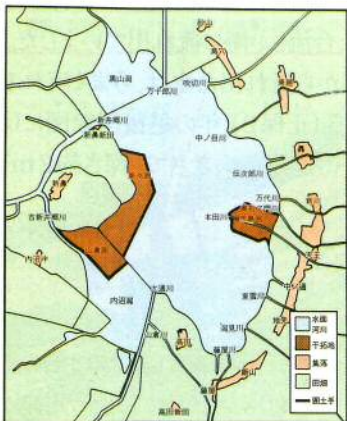


福島潟は、貞享年間(1684~88)には、水面の広さが約5,800ha(約5,800町歩)との記録があります。今の福島潟の約30倍の広さで、とても大きな潟でした。

## ■ 近世の開発

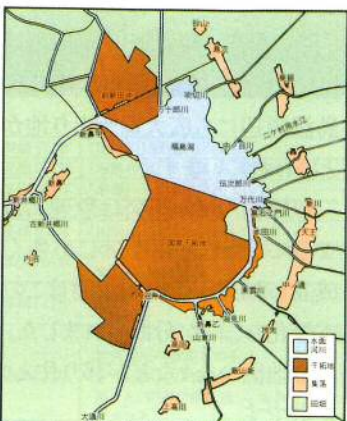
開発が進んだのは、1755(宝暦5)年に幕府が、福島潟の開発を頸城郡鉢崎村(現柏崎市)の山本丈右衛門に許可したときからです。丈右衛門は、潟に流れ込む水量を少なくするため加治川や新発田川の改修、新太田川の掘削などを行い、新鼻や太田地区など89haを開発しました。

## 近代の開発



1790(寛政2)年、水原町の市島徳次郎をはじめとする13人衆が開発を行いました。彼らは開発する場所を土手で囲み、水を抜いて水田にする方法をとりました。また、潟に流入する河川の上流から土を流し、潟の底を高くする方法もとられました。さらに、潟の全面開発を目指し、浜茄子新道、山倉新道などの堤防を築き、潟を分割しましたが、洪水などで不成功に終わりました。13人衆の開発面積は潟周辺部の452haでした。

## 現代の開発



1823(文政6)年には、潟周辺は新発田藩の預地となりました。翌年から藩では、阿賀野川から新井郷川への逆水止めの工事や土流し、各新道の堤の強化を積極的に行いました。また、ジョレンで潟の底の泥を掻き上げて田に入れるなど、田畑の安定を図り、452haの耕地を開発しました。

『北区お宝ものがたり』は、博物館などで1冊800円で頒布しています。

## ■ 近代の開発

新発田藩は、1855（安政2）年、潟水面540haを葛塚の齋藤七郎治や内沼の佐藤名平など豪農15人に譲渡しました。新発田藩は、近世土木技術の限界を認識し、潟の全面干拓を放棄したのです。その後、豪商といわれた葛塚の弦巻七十郎や水原の佐藤伊左衛門などに干拓は引きつがれ、1911（明治44）年に、潟は天王の市島家の所有となりました。

## ■ 現代の開発

1956（昭和31）年、国は潟を市島家から買収し、1961（昭和36）年の新井郷川排水機場の完成を契機に、1968（昭和43）年から国営干拓を始めました。23億円の費用をかけ、北側の湿地帯193haを遊水池として残し、169haの農地を生み出して、1975（昭和50）年に完工しました。

現在、遊水池はオオヒシクイ、オニバスなど生物の宝庫として国際的に注目され、人との共生を目指して新たな時代を迎えています。



国営干拓後の福島潟

『北区お宝ものがたり』は 植物館などで1冊800円で頒布しています。



## 福島潟の開発の先駆け 山本文右衛門

山本文右衛門は頸城郡鉢崎村（柏崎市）の出身です。詳細は不明ですが、百姓でありながら船を使った商売をしていたとも、松平伊豆守の家臣だったともいわれています。

丈右衛門が、福島潟の開発を幕府に初めて願い出たのは1742（寛保2）年のことですが、このとき許可は出ませんでした。しかし丈右衛門はあきらめず、再び開発を願い出ました。当時、福島潟は新発田藩の領地だったので、幕府は、潟周辺の33ヵ村を1754（宝暦4）年に幕府の領地とし、その翌年、丈右衛門に開発を許可しました。許可されたのは、水面と草生地、303haでした。

丈右衛門は、今の東京都葛飾区のあたりに所有する土地などを抵当に入れ、3,000両の資金を作り、不足分は資金援助を受けて、開発工事を始めました。

工事は、潟に流れ込む水量を減らしつつ、潟の排水をうながすため、新発田川・太田川などの流路変更が行われました。

しかし、1770（明和7）年11月、新鼻や太田など約89ha（石高は1,910石）を開発したところで、丈右衛門は亡くなってしまいました。あとには4,700両以上の多額の借金が残り、その後、丈右衛門の開発地はすべて幕府に没収されてしまいました。



丈右衛門の供養塔（前新田の延寿庵）

丈右衛門夫婦の戒名が刻まれています。1818（文化15）年建てられたもので、その後に潟開発を行った市島徳次郎ら「水原十三人衆」が50回忌を記念して建立したと伝えられています。



丈右衛門の墓（新鼻）

1864（元治元）年、潟開発に係わっていた斉藤七郎治永治が、丈右衛門を慰霊するために建てたといわれています。



開潟神社（新鼻甲）

福島潟と周辺一帯の開発の先駆者、丈右衛門と永治が祭神としてまつられています。1876（明治9）年に新鼻甲の人々が先祖への感謝と村の団結のため建立しました。

『北区お宝ものがたり』は、博物館などで1冊800円で頒布しています。